

ジェイムズとオットーにおける宗教的経験の分析

村 野 宣 男

宗教には、儀礼などにみられる行動形態や神話・聖典等における観念体系がみられるが、これらは、内的な宗教的経験なしには意味をなさないであろう。儀礼を行い、聖典を読んでも、宗教的経験をもたなければ、宗教にかかわっているとは言い難いのである。ウィリアム・ジェイムズ (William James, 1842-1910) とルドルフ・オットー (Rudolf Otto, 1869-1937) は、ともに宗教において宗教的経験を第一義的なものとして、するどい直観力を持って、宗教的経験についての諸々の分析を行っている。ジェイムズは、最初、医学を志し、心理学・哲学・宗教へと関心を広めた。1901年から1902年にかけてエディンバラ大学で行われたギッフォード講義である『宗教的経験の諸相』(The Varieties of Religious Experience) は、宗教心理学の古典とされている。ジェイムズは又、パース (Charles Sanders Peirce, 1839-1914) によって唱導されたアメリカの哲学、プラグマティズム (Pragmatism) を世に広めた人としても知られている。オットーは、カント哲学の影響を受けたドイツの宗教学者であり、するどい直観をもって、宗教現象の哲学的・歴史的研究を行った。『聖なるもの』(Das Heilige) は、宗教的経験についての直観的・哲学的分析の書として有名である。本論においては、ジェイムズとオットーによる上記の主著における宗教的経験に関する諸分析を比較、検討し宗教的経験を回る諸問題を提起するものである。

ジェイムズとオットーは、両者ともに、客観的・一般的見地から宗教的経験についての

分析を行っている。すなわち、特定の宗教とか特定の個人の宗教的経験ではなく、宗教的経験の一般的特徴あるいは構造を問題としている。宗教的経験には、未開宗教におけるように素朴なものもあれば、高等宗教における複雑なものもある。あるいは、狂信的・非道德的行為に結びつくものもあれば、道德的行為を伴うものもある。すなわち、具体的宗教的経験には、種々の価値が付帯しているのである。ジェイムズとオットーは、これらの諸価値を捨象して、あらゆる宗教的経験に共通なるものを見ようとした。例えば、ジェイムズは、宗教的経験を持つ者に精神病的気質を多く発見したが、ジェイムズによると宗教に精神的価値を置くものが宗教と精神病的気質との関係に対して抵抗感を懐くのは、事実と価値を切り離して考えないだからだとされる。事実に関する存在判断 (existential judgment) と価値判断 (Wert Urteil) とは区別しなければならない。¹⁾ 宗教的経験において社会に貢献するエネルギーが与えられたとしよう。この場合、その人の気質が精神病的なものであっても、宗教的経験の価値には支障を来たさない。ジェイムズの目は、宗教的経験の背後にある客観的精神構造に向けられている。オットーもジェイムズと同様に、価値を取り除いた宗教的経験の原型たるものに関心をもった。われわれが使うところの‘聖なる’ (heilig) という言葉には、道德的な価値が付随しているとして、道德的要素を差し引いた宗教的経験の感情的内容に対してヌミノゼ (das Numinose) という語をオットー自か

ら考え出したのである。²⁾この語からは、道徳的・知的な要素、すなわちオットーが合理的と称するところのものが除去されている。未開宗教から高等宗教までが宗教と呼ばれるのは、それらに共通に見られるいわば非合理的な感情的要因の故であるとして、それをヌミノーズとしたのである。オットーは、感情的内容としてのヌミノーズを驚くべき直観力によって観察し分析する。

ジェイムズとオットーは、宗教的経験をそれぞれ異った角度から見ている。ジェイムズにおいては、宗教的経験をもち者の精神構造が、オットーでは、宗教経験における感情的側面が注目されている。ジェイムズでは、われわれが宗教的経験を通して世界をいかに処理するかということ、すなわち宗教的精神構造が、いかなる機能をもつかということに関心が持たれている。ジェイムズも感情面を見ないわけではないが、オットーは専ら宗教的経験における感情面に関心を持ち精緻な分析を行っている。宗教には、機能的な側面も感情的側面も存在すると考えられるが、ジェイムズとオットーは、それぞれ注目するところが異なるのである。

1

ジェイムズとオットーは、異なった角度から宗教的経験を見るのであるが、そもそも宗教的経験が存在しなければ議論は始まらない。ジェイムズは“神の証明に関する推論がいかに必然的なものであろうとも、殉教者は、単なる推論の故に炎の中で唄いながら死んで行ったのだろうか。”³⁾と述べているが、宗教は第一義的には、経験とそれに基づく活動なのであって知的な次元に属するものではない。神は、証明によるのではなく、経験において実在するものである。われわれは‘実在の感覚’ (a sense of reality) なるものを持っている

とジェイムズは主張する。オットーが『聖なるもの』において言及している‘実在の感覚’ (Realitätsgefühl) は、実は、ジェイムズが『宗教的経験の諸相』の中で呈示したものである。オットーはこの書から次の部分を引用している。“人間の心においては実在の感覚、すなわちそこにある何ものかに対しての知覚が存在する。これは客観的現存の感覚である。現代の心理学は、存在するものはある特別な‘感覚’によって存在するものとして認識されると主張するが、‘実在の感覚’はこの‘感覚’よりも更に深く、根本的なものである。”⁴⁾神の存在は、この特殊な実在感覚によって捉えられ確認されるのである。

宗教的経験において宗教的対象は捉えられるのであるが‘宗教的経験’とは、はなはだ曖昧な概念である。単なる感情的要因のみを経験とするなら、宗教的経験から外れるものが多く出てくる。神と人間との間の超越的關係や神による救済などは、単なる感情的事柄ではない。超越性は論理的關係であり、救済は機能的關係である。救済において人間の魂は根本的に変化し、行動も変る。機能的關係は、経験の概念からはみだすものである。しかし、このような論理的・機能的關係を含めた宗教的対象との全体的かかわりを宗教的経験ということもできよう。このように宗教的経験の概念は曖昧であるので、宗教（これも曖昧な概念であるが）には(1)宗教的対象とわれわれの間の論理的關係の側面(2)宗教的対象とわれわれの間における感情的關係の側面(3)宗教的対象のわれわれに対する機能ならびに宗教的対象との機能的かかわりににおいてわれわれの側に生ずる効果の側面が存するとした方が明確になる。宗教現象は、これら三つの側面を持つといってもよいであろう。あるいは曖昧なる宗教的経験という概念を使って宗教的経験を回る三つの側面という表現も可能であろう。これまで‘宗教’・‘宗教現象’・‘宗教的経験’

を回る'などの表現を使ってきたが、意味は同一である。実は、ジェイムズもオットーも、'宗教的経験を回る'事柄の分析を行っているのである。両者による分析を以上挙げた三つの側面から検討してみたい。

ジェイムズは“回心の経験の時を直接充すところの感情に目を向けるならば、最初に注目されるのは高い力の支配という感覚(sense of higher control)である”⁵⁾としている。又、ジェイムズは、宗教的な心の転換を遂げた聖者の心的特徴たる聖者性(saintliness)について述べているが、まず第一に次のような心的特徴が注目される。“この世の利己的な小さな関心に充されている生命よりさらに広い生命の中にいるという感覚が生じ、理想的な力が存在するという確信を持つ。この力は、知的であると同時に感覚的存在でもあり、キリスト教の聖者性においては常に神として人格化されてきた。しかしながら、抽象的道德的理想・愛国心による理想郷などいわば聖なるもの正しいものの内面的形態をとるものも又、私が見えざるものの実在の講義で示したように真の主として感ぜられるのであり、われわれの生命を拡大するのである。”⁶⁾ここで述べられた理想的力とは次のような関係をもつ“この理想的な力がわれわれの生命と親密に結びついているという感覚(a sense of the friendly continuity)が生じ、そして、この理想的な支配下に進んで自己を放棄(self-surrender)するのである。”⁷⁾ジェイムズにとって宗教的対象は、自己をその前に放棄せねばならないところの絶対的であり高い力による支配を行う。人間との間には絶対と相対の論理が成立する。しかし、この絶対的なものは、より広い生命あるいは理想とされており、われわれの生命を拡大する関係にもある。宗教的対象と人間との関係は、単に宗教的対象が超越的であるというのではなく、宗教的対象の側からの人間への働きかけにより

人間が生かされる側面を持つ。これが'宗教的経験を回る'第一の側面、すなわち宗教的対象との論理的関係である。そしてこのような関係に伴う、宗教的感情が成立する。すなわち宗教的対象による支配の感覚とその対象に対しての親密性の感覚に伴う感情である。これが第二の宗教的対象とわれわれの間における感情的側面である。第三の機能的側面。すでに第一の論理的側面の説明において、宗教的対象は人間の生命を拡大するという機能的関係に言及した。ここで生命の拡大が行われるのであるが、心理的効果についてはどうであろう。ジェイムズは“宗教は、又、次のような心理的な特徴を含むのである。”として二つの特徴を挙げる。第一は“贈りもののようにして生命に与えられるところの熱情である。この熱情は、心をうっとりさせせることもあれば、又、誠実なる行為あるいは英雄的行為に訴えるのである。”次には“安全性に対しての確信と安らぎの気持ちが生じ、他人に対し愛の感情が支配するのである”⁸⁾人間は、挫折し分裂する病める魂を持つものとして捉えられている。⁹⁾宗教は、このような人間に、生命を与え安らぎを与える救済の役割をもつのである。

2

次に、オットーによる宗教的経験の分析に目を転じたい。オットーは、具体的歴史的宗教形態から道德的・知的要素を引き抜いた、いわば、純粋な宗教感情の要因をヌミノーズとしたのである。ヌミノーズは、宗教的対象に対して懐かれる感情内容である。オットーによると、ヌミノーズは対立する二つの要因によって構成されているとされる。反撥的契機である'戦慄すべき'契機(das Moment des tremendum)とわれわれの心を惹きつける'魅するもの'の契機(das Moment des fas-

cinance)の二つである。¹⁰⁾すなわち、宗教的対象は、一方では思わず身を引くところの畏しい感情をわれわれに懷せるのである。対象が未開宗教における妖怪であろうと、高等宗教における神であろうと、宗教的対象である限り一種独特の反撥的畏しさがあるとされる。一方宗教的対象はわれわれを魅するものである。宗教的対象は、愛(Liebe)、慈悲(Erbarmen) あわれみ(Mitleid)をもってわれわれに働きかけるのである。¹¹⁾宗教的対象は、われわれを苦境から救済(Erlösung)するものである。¹²⁾オットーは、ジェイムズの『宗教的経験の諸相』における回心の事例を挙げて救済の喜びに言及している。オットーによると、ヌミノーゼを構成するところの‘戦慄すべき’ものと‘魅するもの’の契機は同時に働くのであり、対立の調和(Kontrastharmonie)をなしているとされる。¹³⁾すなわち、宗教的対象の畏しさは、単純なる畏しさではなくて、同時に愛が背後にあるのであり、宗教的対象の愛の背後には、同時に畏れがある。

ヌミノーゼの感情は、宗教的対象に対して懷かれるのであるが、宗教的対象はそもそもわれわれにとって絶対的に超越しているという論理的関係における感情がある。オットーによると人間は、宗教的対象を前にして被造物感情(Kreaturgefühl)を持つとされる。すなわち、人は宗教的対象を前にして無(Nichts)であるという感情である。¹⁴⁾自己が無であるということは、宗教的対象の偉大性の否定的表現である。宗教的対象は、日常的なものと隔絶した何ものかである。それは絶対他者(das ‘Ganz andere’)¹⁵⁾であり、神秘的で隠されたもの、すなわち秘儀的なもの(mysterium)¹⁶⁾である。先に示した‘戦慄すべき’契機も、‘魅するもの’の契機もこのような性格をもつ宗教的対象の契機である。したがって秘儀的なものも、‘戦慄的な秘儀’(mysterium tremendum)であるとされる。

¹⁷⁾宗教的感情は、これらの諸契機を含んだ統合体である。オットーは、以上のように、宗教的対象との間に成立する宗教的感情をするどい直観力によって分析したのである。

オットーは、宗教の機能的側面に関しては関心を示さない。‘魅するもの’(fascinans)の説明の際に言及されている宗教的対象の救済の行為は、宗教的機能に外ならない。しかし、救済は、fascinansの感情の説明のために単に言及されたのであり、宗教の機能は特に問題とされないのである。

3

宗教的現象は、論理的・感情的・機能的の三側面から眺められることを指摘したが、この三側面からジェイムズとオットーの宗教現象に関する見解を比較したい。最初に論理的関係と機能について、次に宗教的感情について考察する。ジェイムズもオットーも、自我を宗教的対象に対して放棄する無の立場を取っている。宗教的対象は超越的であるという関係をもつ。ジェイムズは更に、宗教的対象と自我とは親密な関係にあり、宗教的対象より自我にエネルギーが与えられる関係を指摘する。自我が、宗教的対象によって力づけられるという宗教的現象が見られるが、この現象の構造的、力学的関係の側面が宗教的対象と自我の論理的、機能的関係である。論理的関係は構造的関係であり、構造的関係において宗教的機能的関係がある。丁度、物理的運動は、力学の法則によるのと同じである。力学の法則は、数学的關係によって表現される。数学的關係それ自体は何ら物質ならびに運動の概念を含まない。現実の物質的運動的關係において数学的關係が現象化され、現実の力学的・機能的関係が成立する。従って構造と機能とは二つの異った概念である。宗教的対象が超越的であるという概念、あるいは宗教

的対象と自我が連続的であるという概念は、単に構造的である。具体的宗教形態において、宗教的対象と人間の間に現実的運動関係が成立してはじめて両者の間に、力学的、機能的関係が成立してくる。宗教的対象が超越的であるという関係において、力学的関係が働いているのであり、一定の結果をもたらす。オットーが被造物感を懐き、自己を無と感ずるのも、このような力学的関係の上に捉えられねばならない。この力学的関係は、単にこのような感情を生みだしているのではなく、精神的転換とそれに伴う結果を生みだしているのである。

宗教的感情は、宗教的対象に対する構造的・力学的関係において機能する場面に伴って生ずるのである。宗教的感情の背後には、必ず構造的・機能的関係が存在する。オットーは、宗教的対象との間の宗教的感情のみを考え、宗教的機能を考えていないように思えるが、實際上、宗教現象から機能を排除することはできない。しかし、宗教的感情一般には、次の二種の区別をたてることができる。一つは、宗教的対象とわれわれとの間の関係において生ずる感情である。これは、例えば‘高い力の支配’のように宗教的対象に対して懐かれるものと、自己の‘無’のように自己に対して懐かれるものがある。他方は、宗教的対象がわれわれに機能することによって生ずる感情である。例えば、救済による‘喜び’である。救済による‘喜び’は、宗教的対象との関わりにおいて成立するものではなく、関わりの結果として主観の側から成立してくるものである故に、宗教的感情とはいえないのではないかと考えられよう。しかし、俗的關係によって助けられたときの喜びと、神の救済による喜びは質的に相異なるであろう。感情はある脈絡の中にあるものであり、感情それ自体を経験することはないとすれば、この‘喜び’はやはり宗教的感情といえるのではないか。宗

教的機能関係に伴って感情が生ずるのではなく、感情によって宗教的機能関係が成立するという考え方もあろう。オットーはこの見解を持っていると考えられる。しかし、ジェイムズの回心の記述をみると、心の転換が行われ、今までの生き方が変えられることがまず問題となるのであり、そこに感情が伴われる。感情が求められているのではなく、心の転換が求められる。心の転換が先決である。すなわち、宗教的対象を経験すること、宗教的対象との関係によって心的転換が行われることが問題となるのであり、これによって救済が実現される。この過程において、人は、それぞれ異なった感情をもつ。以上、宗教的感情に関しての一般的考察を行ったが、ジェイムズとオットーの宗教的感情に関する考察に戻りたい。ジェイムズは、オットーと異り、まず宗教現象における構造と機能とに関心を持ったが、それに伴う感情についても述べている。しかし、オットーはジェイムズよりはるかに精緻に宗教的感情を分析している。宗教的対象の超越性に関して、ジェイムズは、単に高い力の支配とすることをおとては被造物感情とする。オットーにとって、宗教的対象は人格的であるのに対して、ジェイムズは抽象的原理にまで拡大していることもジェイムズにおいて宗教的対象との間の感情の豊かさを欠く原因でもあろう。しかし、オットーとジェイムズの宗教的感情の分析において、最も注目を引くのは、ジェイムズにおいてはオットーのいうところの *tremendum* の契機が、非常に稀薄であることである。ジェイムズが宗教的対象に対して懐くところの感情は、オットーのいうところの‘魅するもの’ (*fascinans*) の感情である。ジェイムズは、多くの回心者の手記を報告しているが、そこには、神の戦慄すべき姿は示されておらず、神の愛、あるいは慈悲によって精神が満されることが強調されているのである。例えば、

信仰復興運動者 (revivalist) のヘンリー・アライン (Henry Alline 1748-1784) の次のような手記が紹介されている。“私が神に私自身を任せ、神が神の意志のまゝに私を支配するように望んだとき、救済の愛が聖句を口ずさんでいる私の心に入りこんできた。その愛の力によって私の魂は融けてしまうほどであった。罪責の重荷は去り闇は消え去った…”¹⁸⁾ ジェイムズとても宗教は厳粛なるものであることを否定はしない。宗教的幸福は、単なる動物的幸福とことなり、厳粛なる要素 (solemnity) を持つとして次のように述べられる。

“厳粛性は、抽象的に定義することは困難である。しかし、その特徴のいくつかは十分明白である。心の厳粛なる状態は、決して粗雑でもなく単純でもない。それは、その構成要素として反対物がある程度含んでいると思われる。厳粛なる喜びは、その甘美さの中に一種の苦みを持つのであり、厳粛なる悲しみは、内心においてわれわれが受け入れるところのものである。”¹⁹⁾ 厳粛性の中には反対物が存在しているとの見解は、オットーにおける‘戦慄すべき’契機と、‘魅するもの’の対立の調和を思わせる。しかし、厳粛なるものの中には、宗教的对象の怖ろしさの響きはない。そこにおける苦みは、tremendum にまで至っていないのである。このことは、ジェイムズが人間の明るい側面のみを見ていたということの意味しない。ジェイムズは、人間を健全な心 (healthy-mindedness) と病める魂 (the sick soul) を持つ者に分類し、前者は、物事をくよくよ考えなく生きて行ける者、後者をその反対の者とする。人間は、反省的な存在である以上必ず魂を病むものである。“病的な心にとっては、単純で健全なる心は、言いようもなく盲目であり浅薄に思えるのである。”²⁰⁾ とジェイムズは述べる。ここに救済の宗教が必要となってくる。しかし、宗教経験そのもの

は、ジェイムズにとって、tremendum の要素をもたないものである。

ジェイムズは、構造的・力学的関係と機能に関心を持ち、オットーは感情的側面に関心を持った。三つの側面は、それぞれ関連し合っており、別々に考えることはできない。したがって、オットーが分析した感情も、構造的・力学的関係ならびに機能と関連づけられねばならない。fascinans における救済の働きは、ジェイムズの考えるように、超越者からの力の働きの想定においてはじめて可能である。超越的宗教の対象は、この fascinans の感情をもたらすと共に、同時に tremendum なるものとして感ぜられるのである。ここには対立の調和がある。しかし、われわれと宗教的对象との関係は、常にこのようにバランスのとれたものとは限らない。オットーが指摘するように、発展段階の初期においては、宗教的对象は単に怖いものであり得るのである。²¹⁾ 神は、われわれにとって単に恐ろしいものでありうる。したがってジェイムズが指摘する宗教的对象との構造的・力学的関係を、唯一の関係とすることには問題がある。ジェイムズにとって、宗教的对象は、われわれにエネルギーを与え救済する役割をもたねばならない。この観点から、反動的要因たる tremendum が外されたのである。オットーの宗教的経験の分析は、宗教の機能の考えに迷わされない結果、より事実には忠実なものとなっている。

4

以上、ジェイムズとオットーにおける宗教的経験を回る見解を比較したが、ここでは、補足的に罪の意識の問題を取上げ、オットーの方法において評価されるべき点を指摘した後、宗教の価値評価の問題を考えたい。ジェイムズにとっても、神は常に優しい顔をして

いるものではない。神の前に人は罪の意識をもつ。オットーによると罪の意識は、神の畏しさからくるのではなく神の絶対性と自己の不完全性の関係からくる。神の前に立つ人間は、自己に罪を感じ神に救いの手を延べるのである。ここでは‘魅するもの’の神が存在する。ジェイムズによると罪とは“自己の存在の創造者と正しくない関係に立っている”ところから生ずるとされ、²²⁾ “現在における不完全性 (incompleteness) と誤り (wrongness) が罪である。”²³⁾ という。そして“回心とは、正しさ (righteousness) に向って努力するというより、罪からの脱出の過程である。”²⁴⁾ とされる。罪は、絶対なる聖なる神と相対的自己存在の関係から生ずる。神の無言の存在そのものがわれわれの側に罪の意識を生じさせるのである。そしてわれわれは、神に救済を求める。オットーは、罪を‘聖なるものの前での畏れ’ (Scheu vor der sanctitas) とするが、この畏れは神の tremendum な力に対して生ずる感情ではないとする。tremendum な力に対しては盲目的服従はあっても、罪の意識は生じない。²⁵⁾ 罪は神の tremendum なる契機に関係するのではなく、神の存在全体の価値との関連において生ずるものである。オットーは、宗教的対象に対して被造物感情を立てた。この感情において、人間は無であるという意識をもつのであるが、同時に絶対的汚穢の感情 (das Gefühl der schlechthinger Profanität) を持つことによって罪の意識が成立するという。²⁶⁾ オットーの主張するところによると、ヌミノーズの感情にも種々の発展段階があり、あるものは単に tremendum の要因を持つ魔的 (dämonisch) なものであり、あるものは聖なる (heilig) ものである。人は聖なるもの (das Heilige) の前で、自らが汚れていると感ずるのである。罪の意識は、必ずしも道徳と関係することなく成立するが、“このヌミノーズの無価値の性格が、道徳的

欠陥へと移行行き、その中に入りこみ包摂されるときに、単なる‘反法則性’は罪となる。”²⁷⁾ とされる。神聖であり絶対なる神と人間との関係から罪の意識が生ずるということに関しては、基本的には、ジェイムズもオットーも一致している。しかし、オットーが、罪と道徳とを切り離して考えるのに対して、ジェイムズの関心は、道徳的不完全性と罪との関係にあり、罪が意識される場面は、道徳的領域外にも存在することに気付かれていない。オットーが、罪の現象的分析に関心を持つに対して、ジェイムズは如何に罪から逃れるかという実践的側面、すなわち回心に興味を持っているのである。罪の問題に関しても、ジェイムズは機能的側面への関心の故に、現象を正しく見る目を失っている。ここでも、オットーの直観による分析は、評価されるべき点を持っているのである。

オットーは、‘聖’という概念に本来的には、道徳的意味を付与していないが、聖と道徳は結びつくものであるとして次のように述べる。

“ほとんどの場合、ヌミノーズは、社会的・個人的観点から義務・正義・善などの理念と関係する。これらの理念は、宗教的客体の意志となる。宗教的客体は、これらの理念の保護者・秩序者・創造者となり、理念の根拠あるいは本源性となる。次第にこれらの理念は宗教的客体の中に入りこみそれを道徳化する。‘聖なるもの’ (das Heilige) は善きもの (gut) となり、善はしたがって聖なるものとなり、両者の契機はもはやわかち難く混合される。そして、聖なるものが善であり聖であることにおいて聖なるものの全き意味での複合概念が生ずるのである。”²⁸⁾ すなわちオットーは‘聖なるもの’という概念に道徳的意味を含ませようとしているのである。このように、ヌミノーズを道徳化することをオットーは、ヌミノーズの合理化 (Rationalisierung) と呼んでいる。²⁹⁾ ヌミノーズが合理化されたところ

の‘聖なるもの’という概念は、明らかに価値概念である。オットーは、この‘聖なるもの’という概念を基準として宗教の価値判断を行おうとして次のように述べる。“文化に対しての貢献、‘理性’と‘人間性’の限界（この限界は、以前は宗教なしに定めうると信じられたのであるが）との関係、あるいは宗教の外形性などは、宗教の宗教としての価値 (Wert) を測る基準には絶対になり得ない。単に宗教に固有なる内的なるものである聖なるものの理念 (die Idee des Heiligen), そして、与えられた個々の宗教が、この理念にいかに適合しているかが、この場合基準となるのである。”³⁰⁾すなわち、宗教を効果の面からみたり、哲学的に理性の限界から考察したり、外形的な儀礼を観察したりすることからは、宗教は評価できないのであり、聖なるものであるか否かによって価値が定まるとされる。しかし、この‘聖なるもの’は内的なるものであり、直観によって把握されるのである。宗教的直観をもたないものは、‘聖なるもの’が何であるかを知らることができず、したがって宗教的価値判断を行うことができない。このような主観的価値判断の基準に対して、ジェイムズはきわめて客観的な基準を提出する。

われわれと宗教的对象とのかわりが一定の結果をもたらすときに宗教の価値が問題となってくる。ジェイムズは宗教的回心の結果生ずる心理的特徴を聖者性 (saintliness) とする。聖者性の特徴は先に触れたが、理想的なより大きな人格・非人格的な力の前に自己が放棄されていると同時に、それと親しく結びついているという感覚である。聖者においては、このような“精神的情緒が人格の精神力の習慣的中心”³¹⁾となっているのである。この結果、聖者の行為、すなわち禁欲・情熱的行為・純潔・慈愛などが生ずるとされる。³²⁾宗教の価値とは、結局、これらの聖者の性格

から生ずるところの結果の価値の問題となる。上に挙げた禁欲・情熱的行為・純潔・慈愛は、宗教的人間に見られる客観的特徴であり、価値概念ではない。ジェイムズは聖なるものを、オットーのように価値とは結びつけていない。ここには、ジェイムズの冷静な目がある。さて、聖者の行為の価値判断の基準が要求されるのであるが、ここでジェイムズは、プラグマティズムの価値基準を導入するのである。プラグマティズムの原理に従えば、宗教の価値は、その成果 (fruits) によって、是認されたり、非認されたりする。³³⁾“宗教の成果は、……他の人間行為の成果と同様に、極端になることによってもたらされる弊害に陥りやすい。常識が成果を判断しなければならない。”³⁴⁾として、ジェイムズは、常識 (common sense) を重視する。常識の概念には不明確なところがあるが、ここからは現実的生活から遊離したり、現実的生活を破壊するところの狂信的宗教行動の価値が批判される。ジェイムズにおいてもオットーと同様、宗教の道德化が問題となっている。又、ジェイムズでは、知的能力も価値を生み出す重要な要因とされる。例えば、慈愛も、知性を欠くならば不適格者を保護し、寄食者と乞食を養うことになりかねない。³⁵⁾ジェイムズでは、ある事柄が、宗教的であることと価値的であることが区別して考えられた。これに対してオットーは‘聖なるもの’という両者が混合した概念を考えたのである。ジェイムズでは、宗教的なるものの価値判断の方法が明確であるのに対して、オットーでは非常に曖昧になっている。オットーでは‘聖なるもの’に対しての直観が問題となっているが、事実上は、具体的宗教現象に関しての道德的判断がこの直観に関与しているのであり、ジェイムズと同様の価値判断のプロセスを経過しなければならない。ジェイムズとて、宗教的事柄が道德的価値を持つときに、オットーが感ずる‘聖なるもの’と

同様の感覚をもつのである。

オットーは、宗教的感覚をいかに他者に伝えるかという伝達の問題に関心を持ち、ジェイムズは、いかに宗教的回心を成就するかという点に関心を持った。この点はここで議論することを避けるが、ジェイムズが観念の役割を重視したことを指摘しておきたい。オットーは、感情を重視するが故に、観念を軽視した。ジェイムズは、基本的には、宗教は、まず経験されるところから始まるとしておきながら、同時に観念的要因をも重視するのである。ジェイムズはまず、われわれの経験から観念を除去することができない事実を確認する。“われわれは考える存在であり、われわれのいかなる働きからも知性の参加を除くことはできない。われわれが独言するときでさえも、われわれの感情を知的に組立てるのである。われわれの個人的な理想・われわれの宗教・神秘的なる経験は、われわれの思考する心を背景としているのである。”³⁶⁾そして、ジェイムズは、“あらゆる理論的相異は實際上の相異につながる”³⁷⁾というプラグマティックな原理の上に立って観念の役割を考える。宗教における観念の役割は、『プラグマティズム』において詳細に論ぜられている。宗教現象には、論理的（構造的・力学的）側面・感情的側面・機能的側面に加えて知的・観念的側面がある。ジェイムズとオットーにおける宗教的経験を回る見解は、宗教現象を全体的に公平に捉える方法について考えさせるのである。

注

- 1) William James, *The Varieties of Religious Experience*, Longmans, 1952, p.6
- 2) Rudolf Otto, *Das Heilige*, Verlag C.H. Beck München, 1963, s.6.
- 3) *The Varieties*, p.492.
- 4) *The Varieties*, p.58. *Das Heilige*, s. 11.
- 5) *The Varieties*, 238.

- 6) *Ibid.*, pp.266—267.
- 7) *Ibid.*, p.267.
- 8) *Ibid.*, pp.475—476.
- 9) *Ibid.*, 6—8 章参照
- 10) *Das Heilige*, s.42.
- 11) *Ibid.*, s.43.
- 12) *Ibid.*, s.49.
- 13) *Ibid.*, s.42.
- 14) *Ibid.*, s.10.
- 15) *Ibid.*, s.31.
- 16) *Ibid.*, s.28.
- 17) *Ibid.*, s.28.
- 18) *The Varieties*, p.214.
- 19) *Ibid.*, p.48.
- 20) *Ibid.*, p.159.
- 21) *Das Heilige*, s.43.
- 22) *The Varieties*, p.167.
- 23) *Ibid.*, p.205.
- 24) *Ibid.*, p.205.
- 25) *Das Heilige*, s.68.
- 26) *Ibid.*, s.67.
- 27) *Ibid.*, s.69.
- 28) *Ibid.*, s.135.
- 29) *Ibid.*, s.135.
- 30) *Ibid.*, s.200.
- 31) *The Varieties*, p.266.
- 32) *Ibid.*, pp.268—269.
- 33) *Ibid.*, p.321.
- 34) *Ibid.*, p.332.
- 35) *Ibid.*, p.347.
- 36) *Ibid.*, p.423.
- 37) *Ibid.*, p.433.